

令和3年度 香川県歯科医学大会 特別講演II

-デジタル時代をふまえて考える-

チェアサイドとラボサイドで知っておきたい 咬合調整をなくすための臨床テクニック

「技工物の再製作をなくしたい！！」

「クラウンの咬合調整を減らしたい！！」

そうした補綴のトラブルを少しでも解消したいと思い、執筆したのが『補綴再製をなくすための臨床テクニック 24』です。

2018年に上梓し、おかげさまで2020年には増刷となりました。

補綴に関しては、これまでに歯科医師向け、歯科技工士向けに多くの知識や技術が紹介されてきました。ですが、チェアサイドとラボサイドをつなぐ知識や技術というのは、あまりなかったのではないのでしょうか。その中でも咬合調整というのは、日々の臨床に大きく関わる場所。

フルジルコニアのクラウンも臨床で多く活用されていますが、その調整、研磨は簡単ではありません。メタルクラウンも、金属価格の高騰を考えると、調整が少ないに越したことはありません。なによりも、咬合調整がなければチェアタイムも短くなり、補綴の品質も高くなります。

咬合調整量を減らすために、どのような知識と技術を活用しているのか、私自身の臨床例を通じてご紹介いたします。

また、最近では口腔内スキャナーになって、補綴の調整量が減ったという声も聞きます。確かにデジタルの精度は高く、デジタルを導入することで臨床のスタイルは大きく変わります。しかし、それもチェアサイドとラボサイドの連携があってこそです。

チェアサイドとラボサイドの連携というのは、世界的に見ればとても特徴的なことで、国家資格としての歯科技工教育があり、それを形にしてきた歯科医師と歯科技工士がいるからこそ。これを発展させることは、今後のデジタル時代に対応するだけでなく、世界に誇れる日本の歯科医療につながっていくのではないのでしょうか。

今回は、書籍では触れていなかったデジタルや紹介していなかったケースなども交えながら、いろいろとお話しさせていただきます。

歯科医師、歯科技工士、歯科チームで、一緒に補綴を考えていきましょう！